

近代日本知識人にとっての「支那語」の多重的意味 ——雑誌『中国文学月報』（『中国文学』）を中心に——

2013.10.14 於秋田大学

朱 琳（東北大学）

1 研究背景・目的

本発表は、1930年代～1940年代における日本の知識人の中国語認識について、中国文学研究会の機関誌『中国文学月報』（60号以降『中国文学』と改題）を用いて検討を試みることにする。

中国文学研究会は竹内好、武田泰淳、松枝茂夫らを中心に、1934年に成立された文学団体である。『中国文学月報』（『中国文学』）は、その機関誌であり、1935年3月～1943年3月の間、計92号が発行された。本誌の内容は、主に次の内容が含まれる。①同時代の中国文学の紹介・評論、②中国古典文学の紹介、「漢学」批判、③中国語関連問題、④現地報告、⑤他国の中国研究、⑥同時代の中国文化動向。

特に本誌において、「支那語」問題は頻りに議論され、大まかにいうと、主に「支那語」学、「支那語」教育、「支那語」翻訳、大陸進出と「支那語」という四つの面に分けられる。そして、一般認識では「戦争語学」として認識されていた「支那語」について、竹内好をはじめ、多くの知識人は、「支那語」の学術的な研究方法が必要だと主張し、異質な言論が多く見られる。しかし、本誌において、「支那語」は単純な語学的意味だけではなく、多様な視点から検討された。

今回の発表では、戦争背景の下に、当時「戦争語学」として位置づけられた「支那語」はいかに誌上で再認識され、また、その様々な「支那語」に関する言論が、何を意味するかを考察してみたい。

2 研究方法

雑誌は、近代において情報伝達のための重要な媒介であり、その情報量の豊富さや同時代資料としての価値は、他の資料に見られない特徴を持っている。本発表で利用された資料は、『中国文学月報』（『中国文学』）の復刻版（汲古書院、1971年）であり、全9巻がある。

研究方法として、まず、全92号を通読したうえで、すべての「支那語」関連の文章、編集後記、会報を拾い出し、データ化した。これによって、本誌における「支那語」の全貌が把握でき、さらに収集されたデータを分類することを通じて、「支那語」がどのような視点から議論されたのが明確化される。さらに、各文章の内容を分析し、「支那語」の背後に隠れている含意を探り出すこととしたい。

3 先行研究

本課題に関して、まず秋吉収は、「『中国文学（月報）』と中国語：竹内好らの活動を軸として」^①において、研究会の行なった中国語講習会や誌上に掲載された中国語教育に関する論文を提示し、研究会の守旧派との闘いを考察した。そして、「雑誌『中国文学月報』を逐一繙けば、（略）彼らがいかに中国に対して真剣な眼差しを注ぎ続けていたかが、ひしひしと伝わってくる。そしてその地道な営みこそが、日本の中国に対する「間違い」への精一杯の抵抗であった」^②と結論をつけた。

ただし、戦争期という背景を考え、特に太平洋戦争勃発後、竹内好が『中国文学』第80号（1942.1.1）

^① 秋吉収 「『中国文学（月報）』と中国語：竹内好らの活動を軸として」（『中国文学論集35』、九州大学中国文学会、2006年）。

^② 前掲論文、69頁。

に発表した「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」を考慮してみると、事実はそう簡単に見えないと考えられる。本文の発表は1942年1月であり、内容からみれば、研究会の大東亜戦争への見解の質的变化ともいえる。それによって、研究会の中国研究を、単純に「精一杯の抵抗」と位置づけることに疑問が感じられる。要するに、研究会が明らかに太平洋戦争に影響された以上、誌上に現れた「支那語」に関する言論がどのように変化していたのかは、疑問が残されたままとなっている。

また、熊文莉^①は、中国文学研究会の翻訳問題に関して、「中国」と「支那」の呼称、研究会の翻訳活動を整理し、研究会は「何のための訳」を重視し、その翻訳活動も客観的に中国文学を紹介するための行動であると強調した。さらに、熊は、誌上の「翻訳時評」欄を通じて、竹内好と吉川幸次郎との論争を考察し、この論争は単なる翻訳をめぐる個人的批判ではなく、中国文学研究会と漢学の異なりを語っていると指摘した。

しかし、中国文学研究会と漢学の相違に関して、熊は深く探求しなかった。この問題は、翻訳だけではなく、ほかの面にも関連している。また、翻訳は「支那語」と切っても切られない関係があるものの、熊は誌面における「支那語」に関する言論を触れなかった。さらに、翻訳は、単なる中国文学を客観的に紹介するための作業であるか、また、漢学アカデミズムへの対抗にとって、翻訳は何を意味するか。これらの問題が疑問のままである。

4 発表内容

✚ 言語学としての「支那語」

近代日本における一般認識での実用のための中国語は、本誌において学術研究として議論されていた。その始まりは、中国の国語運動への関心である。

竹内好は、第3号（1935.5.16）の「国語に関する諸問題」において、中国の国語問題の重要性を指摘し、その後、第24号（1937.3.1）では「言語問題特集」として出され、中には「国語運動の歴史と問題」という特定テーマが設けられ、中国国語運動の歴史を具体的に紹介した。一方、当時の日本で行われた「支那語」研究に対する不満は、誌上において多く確認できる。特に共通的に指摘されたのは、日本の「支那語」研究の非科学的な方法、学的体系とならなかったこと、そして、西洋と比べるとかなり遅れていることなどである。

それとともに、誌上では、言語学の視点による「支那語」研究の文章が確認できる。しかし、執筆者の構成や文章の数などからみれば、本誌は積極的に言語学研究の文章を掲載したとは言い難い。従って、当時の環境において、「支那語」を言語学として研究すべきという抵抗から発した要望を実行する困難さも窺える。

✚ 「支那語」教育と日本文化の自立

本誌では、理論的な「支那語」研究は盛んに行われていないが、言語応用の面からみた「支那語」は活発に議論され、主として、「支那語」教育と翻訳に関する文章が挙げられる。ここで、誌上での「支那語」教育に関する言論を見てみよう。^②

本誌で掲載された「支那語」教育に関する文章は、1940年～1941年に集中した。中に最もよく論じられたのは、漢文と日本語との混同による「支那語」教育への阻害ということである。竹内好は、中国

^① 熊文莉「中国文学研究会にとっての「翻訳」」（『朝日大学一般教育紀要 36』、2010年）

^② 「支那語」翻訳について、熊文莉の「中国文学研究会にとっての「翻訳」」（『朝日大学一般教育紀要 36』、2010年）で触れられ、これに関して、発表者はまた別の視点から論じたいが、今回は都合により省略させていただく。

文学研究会の代表的な人物として、終始、従来の漢文訓読による教育に反対する弁を貫いた。彼以外の人も、たとえ立場が完全一致しないとしても、漢文教育による「支那語」教育の混乱を誌上において批判した。

例えば、倉石武四郎は、「漢文は、まさしく國語の一部であり、あるひは國語の全部みたいに不當な振舞ひをしてゐることもあつた。(略)支那語ともつかず國語ともつかぬ方法により、支那語が讀めなくなるのはまだしも、國語まで亂雜にしてしまふ」^①といい、彼は、漢文が「支那語」とともに外国語であると主張し、漢文を「支那語」から引き離し、日本語と混同する教育法は、「支那語」教育の発展を妨げ、日本語の混乱も招いたと指摘した。そして、乙寺與志夫は直接に「支那語」教育を論じてないが、漢文を日本語の一部として教授することが、教科書の氾濫と関連するのを言及した。

また、漢文と日本語との混同への批判は、「支那語」教育の枠から日本文化の自立へ延長する。これは、以下の竹内好の漢和辞典への批判から読み取れる。

日本の漢和辞典は、日本語の字引だか支那語の字引だかはつきりしない。漢和字典といふ奴は大抵支那の字典や辭典をつぎはぎして、それに國訓を加へたものに過ぎない。それは日本語を豊かにすることではなくて、逆に日本語を混乱させる働きをしてゐるのである。(略)現在の漢和字典は漢字崇拜の名残であり、中等学校の漢文科と共に、日本文化のためになるべく速かに廃止が望ましい存在なのである。^②

換言すれば、漢文と日本語との曖昧は、「支那語」教育から引き出した問題であるが、それは、「支那語」教育を停滞させただけでなく、日本語の純粋を破壊する要因にもなり、日本文化が「漢字の奴隷」^③から逸脱できない所以にもなった。こういう意味で、本誌における「支那語」教育に関する言論は、既存の漢学への抵抗だけでなく、日本文化の自立を図る行動とも言えよう。

✚ 文化交渉と大陸進出としての「支那語」

第 83 号 (1942.5.1) は、『日本と支那語』特集として出版され、その内容の大半は、当時の対中の主要人物の「支那語」習得の歴史、および「支那語」習得が対中関係において発揮した作用に関するものである。本号は、投稿者による執筆のほか、談話者とのインタビューをまとめたものも含まれる。執筆(談話)者について、外交関係、教育関係、軍事関係、商業関係など、様々な分野の有識者が見られる。

そして、本号に掲載されている文章の内容構成はほぼ統一され、各分野の有識者の「支那語」の勉強史、作られた「支那語」関連の業績、そして各分野における語学関連の経験談などがある。例えば、中田敬義(元外務省政務局長)は、「明治初期の支那語」と題して、自分の「支那語」修業史、琉球問題談判と日清講和談判において通訳としての働き、個人的な経験を詳しく述べている。要するに、本誌は最後の「支那語」特集として、内容的にも思想的にも、以前と比べるとかなり異なっている。

前述したように、中国語は「戦争語学」と呼ばれていたため、「日本支那語史」は、日本の中国進出に深く関連している。換言すれば、本号に注目されているのは、日本の中国へ進出する過程において、日本人がいかにか「支那語」を学べ、いかにか「支那語」を応用したかということである。従って、本号は言語特集号であるにもかかわらず、言語学研究の内容が少なく、本号における「支那語」は、以前の誌面

① 倉石武四郎「支那語教育について」(第 71 号、1941 年 4 月 1 日)

② 竹内好「支那文を読む為の漢字典」(第 67 号、1940 年 12 月 1 日)

③ 竹内好「支那文を読む為の漢字典」(第 67 号、1940 年 12 月 1 日)

に議論された言語学としてのものでもなく、言語教育としてのものでもない。

また、内容から見ても、戦時色に染まっているものが確認できる。たとえば魚返善雄は、大東亜戦争において、日本語の進出のための「支那語」の役割を指摘し、「戦争のための支那語習得」という論調が、誌上に初めて現れた。以前の本誌に主張された支那語そのものに注目せよという論調との間に、断層が形成されたと言えよう。

5 結論

「支那語」は、近代日本において、「戦争語学」として認識されていたにもかかわらず、竹内好らの知識人は、言語学としての科学的な研究方法が必要だと主張した。しかし、この主張を本誌では実行されておらず、「支那語」に対する関心は、言語学から教育法へ転じられている。本誌における「支那語」教育への批判は、漢文と日本語との混同に集中した。これは、実に日本文化の自立への切望を語っていると言えよう。また、戦争の進行に従って、「支那語」の大陸進出での役割が誌上に提起される。

従って、竹内好らの知識人にとって、「支那語」は一般認識への抵抗であり、日本文化の自立への切望であり、大陸進出史の一部でもある。語学だけではなく、多重的な意味を持っていると考えられる。